

## 1. 実演家等のキャリアアップに求められていることーグループインタビュー調査

### 1. 1. 調査概要

文化芸術振興基本法および同法に基づく基本方針では、実演家等の地位向上、労働環境整備、人材養成およびその確保について盛り込まれたが、これを契機として、実演家等の養成・研修等のあり方の見直し、政府や芸能団体が行なう事業の推進に向けた提案を行なうための研究の一環としてグループインタビューを実施した。

この調査はこれまでの芸団協の研究の蓄積を踏まえ、実演家等が心おきなく仕事に取り組める「養成・研修・職業継続・退職・社会保障」についてトータルな方向性、ニーズを明らかにし、そのキャリア形成のあり方を検討することを目的とした。グループインタビューの概要は以下のとおり。

#### (1)調査対象グループ

以下の 6 グループ (各グループ 6 名)

- ① 声楽家
- ② 舞踊家
- ③ 演劇
- ④ ミュージカル
- ⑤ 演芸
- ⑥ 邦楽

#### (2)調査実施時期

2003 年 11 月～12 月

#### (3)調査項目

- ◇ キャリアアップの要件
- ◇ キャリアアップに向けた取り組み状況
- ◇ キャリアアップに必要な研修
- ◇ 求めるキャリアアップ支援策

#### (4)調査実施機関

株式会社 インテージ

## 1. 2. 調査結果概要

芸能実演家のキャリアアップの実態や課題を明らかにするために、グループインタビューを通じて、ジャンルの違う 6 グループからそれぞれ 6 名ずつ、芸を磨くために日ごろ考えていることや実際に取り組んでいることを聴いた。そして、さらにそれらを踏まえて、キャリアアップをしていくためにどのような研修・トレーニングやその他の支援策を行政、あるいは団体に求めるかを聴いた。

その結果、ジャンルを超えて何点かの共通要素が見えてきた。

例えば、自分たちとは違うジャンルの人たちとの交流の機会がほしい、先生への遠慮や業界の慣習として違う先生から学ぶことは難しい風潮があるが、できれば一人の先生ではなくいろいろな先生から学びたい、発声法や呼吸法を習得する場がほしい、公演機会や練習の場が足りないといった意見・要望が多くジャンルのジャンルから上がってきている。

芸能実演家のキャリアアップを効果的に支援していくために、これらの意見・要望に対応した事業メニューが考えられる。

以下では、各ジャンルから上がってきたキャリアアップの条件や必要な方策と、それらを受けて今後考えられる事業項目を整理した。

### (1) 異業種交流・横のつながり

<主な発言内容>

● 声楽家 Gr.

音楽家同士で集まって苦労話をする機会は意外と少ない。

● 声楽家 Gr.

まったく違う人たちと触れ合うべきではないかと思う時がある。オペラを観ると、どうしても批評が入ってしまい、純粹に感動できない。

● 演劇 Gr.

劇団協議会を通じて劇団同士の交流はあるが、フリーでやっている人は交流がない。

● ミュージカル Gr.

歌舞伎でも何でも超一流の人はすごくて、それを観てしまうと、あれもほしいこれもほしいとなる。ジャンルでないと思う。

● ミュージカル Gr.

歌の人は歌だけ、踊りの人は踊りだけというところが多くて、横のつながりがない。専門学校同士のつながりとか、お互いに人材を紹介し合えたり、先生を交換するようなシステムがあつていい。

● 演芸 Gr.

交流する場があればいい。音楽関係の人を招いたり、文化の交流親善プラス、そこで何かを教えてもらうとか、教えるという場があるといい。



<考えられる事業項目>

芸能実演家交流会・親睦会の開催

<主な発言内容>

● 演劇 Gr.

それぞれの分野の人たちが空いている時間に、空いている場所でオープンにレッスンができるようになればいい。個人的に声楽を習うのはお金がかかるので難しい。歌舞伎の歩き方も勉強できない。専門家がやっている所にちょっと入らせてもらえると、すごく勉強になると思う。



<考えられる事業項目>

オープン練習場の設置・運営

<主な発言内容>

● 声楽家 Gr.

落語を聴いたり、演劇を観たりすることからヒントを得ることがある。まったく違う分野の人たちと接することの面白みもある。

● 演芸 Gr.

芸団協の主催で、オペラや俳優など、その道の第一人者の講演会があって、質問できるコーナーもあれば行ってみたいと思う。面白がることも我々には大切なことなので。

● 邦楽 Gr.

他業種の人が三味線の講座を聴きに来て、そこで交流が生まれるかもしれない。こちらは発信する側になると思う。発信したいという思いのほうが強い。



<考えられる事業項目>

異業種公演観賞会・講習会の開催

(2) 研修ニーズ

<主な発言内容>

● 演劇 Gr.

バレエや声楽をやる必要がある。日本には俳優のためのメソッドがない。外国にはたくさんあるのだから、その中から持ってくればいい。



<考えられる事業項目>

プロ育成メソッド確立のための研究

<主な発言内容>

● 声楽家 Gr.

先生とのしがらみから、違う先生のレッスンを受けたいと思っても受けられない。他の先生にも習ってみればという先生はいない。

● 舞踊家 Gr.

日本にはプロを育成する場がない。個人個人のワークショップはあるが、先生同士が合同で話し合うようなこともない。

● ミュージカル Gr.

横のつながりがあるレッスンを受けたい。先生間でのつながりがあるって、情報交換もできていて、狭い方法論だけではなく、開放された、学べる場があるといい。日本は一人の先生にしか教わらないという狭さがある。

● 演劇 Gr.

映像に出ている役者は勉強する暇もないし場所もない。技術がないから、年をとってから食えなくなるのは当たり前。

● 演劇 Gr.

自分で劇団を持っている以上は若い子たちに日本舞踊を教えなければならないので、家元の所に行って定期的に教えてもらっている。

● ミュージカル Gr.

年を取ってくると歌と演技ができないと仕事がもらえなくなる。踊りは要らない、となってくる。これからは歌と芝居をやらなければならない。



<考えられる事業項目>

プロ育成オープン型講座の設置

<主な発言内容>

● 声楽家 Gr.

日本にいと、イタリアやドイツ、フランスといったいろいろな国の歌曲をやらなければならない。その国ごとの曲のスタイルや文化、風土から出てくるニュアンスがある。例えばその国を旅行させてもらうとか料理を味わう、語学を勉強し、文化、風土を学べるようなプログラムがほしい。



<考えられる事業項目>

異文化学習コースの設置

<主な発言内容>

● 演劇 Gr.

劇団を出て商業演劇に行ったが、古典が分からないと何もできない。歌舞伎や邦楽はほとんどやっていなかった。

● 演劇 Gr.

関西で“古典に学ぼう”ということで歌舞伎界や落語界から講師を招いて勉強会をしているが、予算的に1年に1回しかできない。芸団協で全国を回っていくような勉強会をしてくれるといい。それが難しければ文化庁からの予算をお願いしたい。



<考えられる事業項目>

古典を学ぶための講座の設置

<主な発言内容>

● ミュージカル Gr.

“総合芸術学院”という考え方があっていい。国立大学並みの、すべてをきちんと教われるカリキュラムが必要である。



<考えられる事業項目>

総合芸術学院の創設

<主な発言内容>

● ミュージカル Gr.

レッスンにも割引があるといい。

● 演芸 Gr.

お金のない若手でも踊りを習いたければ、先生をどこかから連れてきて、教室みたいなことをやってほしい。無料か安いお金で習える制度を作ってもらえるといい。

● 邦楽 Gr.

身体づくりの講座は安ければ行く。ピラティスやボイストレーニングは高い。先生が誰かにもよる。芸団協で調査をし、確実な先生による安い講座をつくってほしい。



<考えられる事業項目>

安価な講座の提供

### (3) 芸術に触れる仕組み

#### <主な発言内容>

##### ● 声楽家 Gr.

先輩たちの姿勢とか演技、発声に身近に触れて肥やしにしている。それが一番、自分にとってプラスになっている。

##### ● ミュージカル Gr.

歌舞伎を観にいけば日本語の深い意味が分かるし、常にいろいろなことを自分でキャッチしておくためにも、他の人の舞台を観たい。しかし費用がかかるので、割引で舞台を観られるようなパスポートがあるといい。

##### ● 演芸 Gr.

踊りを習っている。別に踊りができるようになりたいのではなくて、話しをするうえで踊りができれば多少何か違うのではないかと考えてやっている。少し興味があることはしてみたい。映画もコンサートも芝居も、こういう見せ方があるのかと思いつつ観る。

##### ● 声楽家 Gr.

聴く人を感動させる歌を歌うことは難しい。そのためには生活全般が魅力的でなければならない。自分自身、常に感動する気持ちを持ち続けることが重要である。



#### <考えられる事業項目>

公演鑑賞パスポートの創設

### (4) 心身トレーニング、健康管理

#### <主な発言内容>

##### ● 声楽家 Gr.

オペラ歌手にとってのスキルは、健康管理である。

##### ● 声楽家 Gr.

オペラ歌手のスキルは精神的にいかにか健全に保つかだと思ふ。長い時間、声が出るようになるまで精神的につらい。自殺を考えるくらい追いつめられることもあった。

##### ● 舞踊家 Gr.

最終的にダンスは自分の身体と向き合うということである。向き合い方の方法論はいくつかあるが、向き合うべき時は人によって違う。



#### <考えられる事業項目>

健康管理のための講座・カウンセリングの実施

<主な発言内容>

● 舞踊家 Gr.

自分自分は最近中国武術をやっている。中国武術はスピードがあり、中国の人はスピードをつけるにはどの筋肉がどうなっていなければならないということをよく勉強している。トレーニングとダンスの間にもうひとつ、身体の脈絡を見ていくようなものが必要である。何でもいから、いろいろな角度から自分の身体を見つめられるものがあればいい。

● 舞踊家 Gr.

古武術に興味がある。動きの理論が面白い。知識として持つておくのではなく、イメージとして考え方に触れることで自分たちの動きのきっかけになるのではと思う。

● 邦楽 Gr.

座禅やヨガを習いたい。



<考えられる事業項目>

心身トレーニングコースの実施

<主な発言内容>

● 演劇 Gr.

舞台の場合、言葉を美しく発するためには発声法や呼吸法を身につけなければならない。

● 演劇 Gr.

劇団でボイストレーナーを招いている。定期的にイギリスに行ってボイストレーニングを学び、それを教えてくれる。日本でもボイストレーナーという職種が育っていくといい。

● 演劇 Gr.

芝居は声を出すことから体を動かすこと、表現することなど、部分的にやることがたくさんある。それなのに、それぞれの専門家がほとんどいない。

● 演芸 Gr.

芸団協が主催するボイストレーニングの教室があってもいいし、紹介してくれてもいい。そういうことがあるといろいろなものに挑戦できるし、それが自分の幅を広げるとか、深みを増すということになると思う。

● 舞踊家 Gr.

自分の身体に合う訓練法は何かを見極めなければならない。自分は合気道やヨガの呼吸法を徹底的にやった。

● 邦楽 Gr.

呼吸が浅いからうまく音が出ないという人がいる。呼吸法で変わるのであれば、そういう講座があったほうがいい。



<考えられる事業項目>

#### 発声法・呼吸法教室の設置

<主な発言内容>

● 邦楽 Gr.

ボイストレーニングは洋楽のものであり、邦楽はメソッドが一番遅れている。三味線でも唄でも、邦楽らしい呼吸法とか、邦楽らしい弦楽器の使い方が体系的に研究されればいい。専門の研究機関があってもいい。



<考えられる事業項目>

#### 心身トレーニングメソッドの研究開発

### (5) 公演機会の確保

<主な発言内容>

● 声楽家 Gr.

公演機会を増やすことが必要である。日本で新しく造られたホールは3割くらいの日にちしか稼働していない。

● 声楽家 Gr.

演奏機会を増やしてほしい。それによって皆が学べる。

● 舞踊家 Gr.

舞台の数を増やしてほしい。そこでの失敗から学ぶことも多い。



<考えられる事業項目>

#### 公演機会確保のための助成

<主な発言内容>

● ミュージカル Gr.

地方の建てた立派な劇場は稼働していない。一緒になってプロデュースみたいなことができたり、演目を上演する手助けをしてもらえると公演数が増えて、そこを狙って私たちは活動できる。ステージ数が増やせると思う。

● ミュージカル Gr.

ニューヨーク市では、劇場に対する助成やプロデュースの援助に税金が投入されている。日本でも国や都でそうしたことができるか。

● 演芸 Gr.

寄席の宣伝をしてほしい。併せて、宣伝広告費限定で寄席に助成をしてもらいたい。





<考えられる事業項目>

宣伝・プロデュースに関するサポート

<主な発言内容>

● 演芸 Gr.

ポスターやテレビのスポンサー広告、寄席の営業戦略を立てるコンサルタントの配置などによって、お客さんを集めてほしい。

● 邦楽 Gr.

とにかく人に聴かせることが必要であるが、発表の場がない。そうした場を持つと思った時には、会場の取り方、プログラムの作り方、宣伝の仕方などは知っている人に聞いているが、こうしたことをサポートしてくれるところがほしい。

● 邦楽 Gr.

邦楽界のことをよく知っていて、マネジメントを任せられるところがあるといい。

● 邦楽 Gr.

練習場所より小屋がない。最近一つ潰れた。最近の小ホールには緞帳がない所が多い。完全に洋楽向けになっている。古典を聴かせるようにはなっていない。例えば三味線だと、音の撥ね返りがきつくて適さない。



<考えられる事業項目>

マネジメント・コンサルティングサポート

(6) 練習場の確保

<主な発言内容>

● 舞踊家 Gr.

稽古場と予算がほしい。一時期、企業のメセナもいい線まで行ったのに下火になってしまった。

● 演劇 Gr.

劇団の場合でも稽古場はなかなか空かない。講師を呼んでやるのも難しい。劇団員だからといって、必ずしも全員が勉強しているわけではない。

● 演劇 Gr.

演劇の稽古の場所を提供してほしい。公共施設の会議室を借りようとする、演劇はだめだといわれる。

● ミュージカル Gr.

練習場の確保に苦労している。公民館は演劇禁止というところが多い。

● 演芸 Gr.

稽古場が足りない。意欲があっても習いたくても、先生がいても場所がない。



〈考えられる事業項目〉

練習場の設置・運営

## (7) 情報収集・提供

〈主な発言内容〉

### ● ミュージカル Gr.

ニューヨークのパフォーミングアーツセンターでは、オーディションや先生の情報、レッスンの系統や内容、仕事を求めている人の情報の掲示板がある。オーディションのクローズを取り払って、オーディションや情報や、先生のキャリアについて、インターネットの掲示板で情報提供する仕組みがあるといい。

### ● 演芸 Gr.

インターネットは有効だということが分かった。この人は役者もできますとか、この人は日本舞踊がうまいと、サイトで宣伝するといい。



〈考えられる事業項目〉

オーディション・レッスン情報の収集・提供

## (8) 芸能の地位向上

〈主な発言内容〉

### ● 演劇 Gr.

芸団協が文化庁から助成金を得、地方にも映画や演劇の教育の場を作ってもらいたい。そういう場を作れば、優秀な俳優や年配の人たちが地方に行って、そこで自分の知識を教える。そうすれば、地域の文化レベルが上がるし、俳優たちの生活の場も膨らむ。

### ● 演劇 Gr.

文化レベルをいかに上げていくか。せめて演劇の地位がスポーツと同等に上がるといい。

### ● 演芸 Gr.

演芸畑は他の俳優や歌舞伎などに比べて、多少地位が低く見られているように思う。人間国宝を出すなどにより地位向上が必要である。



〈考えられる事業項目〉

文化行政への働きかけ

### 1. 3. 芸能実演家のためのキャリアアップ支援策

以上のとおり、グループインタビューの結果から得られた意見・要望をもとに、芸能実演家のキャリアアップに必要と思われる事業項目（支援策）を示したが、ここではさらにそれぞれの事業項目のイメージを明らかにするために、考えられる事業内容案をあげる。

キャリアアップ要因	キャリアアップ支援策	事業内容案
1 学ぶ・習う	プロ育成研修プログラムの設計	ジャンル別研修ニーズの把握（ニーズの量・強弱） 先生情報の収集 研修カリキュラムの設計・試行
	プロ育成研修の実施	ジャンル別・キャリア別研修 芸の幅を広げるための研修（演技、踊り、歌・・・） 歌舞伎や邦楽など古典を学べる研修 語学や諸外国の文化、風習を学べる異文化研修
	オープン型レッスンの提供	1人の先生だけでなく、自由に他の先生に習える仕組みの構築 先生情報の収集 先生同士が情報交換できる仕組みの用意
	プロ育成メソッドの開発	研究開発プロジェクトの創設 海外事例の研究・分析 日本型メソッドの開発
	芸術鑑賞機会の提供	芸術鑑賞会の開催 助成公演情報の提供 チケット費用の援助（公演鑑賞パスポート制度の創設）
	練習場の確保	練習場の設置・運営 ・安価 ・利便性 ・自由性
	学びのための情報提供サービス	インターネットによる情報検索・提供システム ・レッスン情報 ・先生情報 ・公演情報 ・ワークショップ情報
	学習費用の負担軽減	研修受講料補助

キャリアアップ 要因	キャリアアップ支援策	事業内容案
2 芸の下地 をつくる	心身ケア・カウンセリング	健康診断の実施 芸能実演家ための健康管理セミナーの開設 メンタルヘルスセミナーの開設 カウンセリングコーナーの常設
	トレーニングコースの提供	発声法・呼吸法トレーニングコースの設定 古武術教室 座禅・ヨガ教室 心身トレーニングのための専門トレーナーの養成 各種メソッドの開発
3 他分野に 触れる	芸能実演家交流会・親睦 会の開催	分野を越えた交流のためのイベントの実施 ・講演会 ・シンポジウム ・懇親会
	オープンスペースの用意	見学可能なオープン練習場の提供 交流サロンの設置
	芸術鑑賞機会の提供	芸術鑑賞会の開催 チケット費用の援助 ・芸術鑑賞パスポート制度
4 場数を 踏む	公演機会の確保	助成公演の実施 劇場に対する経済的援助 公演プロデュース支援 劇場経営に対するコンサルティング活動
	求人・求職情報サービス	インターネットによる情報検索・提供システム ・人材バンク ・求人情報 ・オーディション情報
	観客ニーズの把握	地域住民を対象とした公演ニーズ調査
	キャリアカウンセリング	キャリアカウンセリングの実施 ・キャリアアップ ・キャリアチェンジ ・リタイアメント キャリアカウンセラーの養成

## 1. 4. 各グループからの発言内容

### 声楽 Gr

#### (1) 必要な素養・スキル

- オペラ歌手にとってのスキルは、健康管理だと思う。
- オペラ歌手にとってのスキルは、精神的なことだと思う。音楽家同士が集まって苦労話をすることは意外とない。僕は5年間留学していた。声はピアノと違って10時間も歌えない。最初にある先生のレッスンについて時は5分で声が枯れていた。5分が10分になり、最高3時間くらいずっと歌っていても楽に声が出るようになった。でもそこまで到達するのに何ヶ月もかかった。その間、精神的なものをどう保つかがすごく大変だった。本当に自殺を考えるくらい追いつめられる瞬間もあった。
- 歌というのはすごく難しい。歌を上手に歌うようになれるとか、人をびっくりさせることができるということは、レッスンに通って技術をつけることでできるかもしれない。でも、いい歌を歌う、人を感動させられることができる歌を歌うというのは、何によって獲得できるのか、そこが非常に難しいところだと思う。そのためには、生活全般が魅力的でなければならない。感動する気持ちを持ち続けることが必要だと思う。小さなことにも感動し、喜び、泣き、わめき、感受性の幅を広くし、おいしい物を食べて感動し、紅葉が美しいと思っでは拍手を送る。すべて感動する気持ちをどれだけ広げられるかということかもしれない。
- 歌というには、技術では解決できないものを感じる。その人が幼児期からどうやって過ごしてきたかという環境も歌に出てくると思う。僕が一番幸いだと思うのは、田舎出身だということ。田舎だから、春になれば桜が咲く。田植えがされて緑になる。秋になれば赤になって、冬になれば雪が降って白になる。雪の降る音が聞こえとか、そういう感受性はやっぱり環境が大きいと思う。雪を踏む音とか、理屈では分からないこともある。そういうものを経験できたことは何かの役にたっている気がする。人柄が歌に出るとするのは、最終的にはそれがあると思う。

#### (2) キャリアアップの条件

##### ① 現場から学ぶ

- オペラの現場で先輩たちと身近に触れ、その演技を学び、稽古場での勉強を怠らないようにしている。先輩たちの姿勢とか演技や発声に身近に触れて肥やしにしている。それが一番自分にプラスになっていると思う。
- 現場に行った時、そこに優れた人がいる可能性がある。そこで刺激を受ける可能性があるというのは、とても重要だと思う。でもそういった機会に接することができる人間は非常に少ない。とにかく現場は多くなければならない。現場でなければ伸びないと思う。
- 大学時代に先生方の話を聴いて、先生が言っていることとやっていることが違うと思ったことがよくある。そういう先生にはなりたくない。そのためにも、ステージに立っている姿を生徒に見せなければならぬ。自分の生き方として、ステージが第一というの

は常にある。

- 基本的に演奏家が幸せであるということが大事だと思う。幸せがたくさんあふれているから、それを客席に流し出す余裕がある。そういう大きさが必要だと思う。その大きさを何によって獲得していくかが問題になる。オペラの場合、一生懸命舞台の上で観せても、存在感を獲得していない人の芝居はお客の目に届かない。何も微動だにしないで、他の人が芝居しているのを、その役で観ていることができるかどうかにかかっている。その役柄で人の芝居をずっと観ていることができ、必要な時に動くことができれば、演技は成立しはじめる。それは現場でしか獲得できない。
- 職人は同じ職人の技を批判するところがある。音楽もそういう聴き方になってしまう。作品そのものを楽しめなくなってくる。しかし自分は演奏家でありたいと常に思う。演奏家であって絶対に批評家にはならないようにしようと思う。そういうふうにながら心にかけている。

## ② 教えることから学ぶ

- 学校の先生をやっていると、それが主になってしまう人が多い。そこは気をつけなければいけないところだと思う。現場を伝えていく役目にならないといけないと心にかけている。教えることによって自分の声を見直すきっかけになる。全然歌えない人たちを歌えるようにしていくには、と考えながら、自分も当てはめてみる。
- 今は色々なところで学校の先生として声楽を教えているが、自分は常に舞台に出たり、自分も先生の所に歌のレッスンに行くことは一生続けていきたいと思っている。声楽は自分が楽器で、自分が出している音は自分の耳には違う風に聴こえてくるから、実際に先生に聴いてもらって、それで維持していく。自分もそういう状態でレッスンを受けて、教える時には自分の舞台のキャリアとか自分が先生に教わったことを生徒に還元する。それで生徒が歌えなくなったり精神的におかしくなったら、自分が悪いんだと思う。ではここをこうしていこうと思うことによって、自分も磨かれていく。教えることは、仕事としてではなくて、自分を磨いていく場所と考えている。
- 自分が生徒を教えて、こうじゃないかな、ああじゃないかなと思うことが覆されることもあるし、やっぱりこうだなと思うこともある。日々教えている間に自分もすごく勉強になる。人に教えるためには、自分が常にもっと良くなろうとか、もっとこれを勉強しなければと思うことをやっていかないと、教えられなくなってしまう。いつも同じレッスンになってしまうわけにはいかないので、それ以上のことを自分が勉強する。それは常に心にかけている。

## ③ 留学

- 30歳を過ぎて初めて外国に留学した。イタリアのボローニャに行った。クラシックの中でも分野はいろいろある。その中で自分の役割は何なのかを見つめるいいきっかけになった。それで自分の声を冷静に見つめ直すことができた。方向性をレッスンを通じて感じることはやはり大きかったと思う。向こうで現役の先生に出会ったこともいい経験だった。ものの考え方とか、そういうものがこれからの自分がどうしたらいいかを考えるきっかけになった。

#### ④ 経済的条件

- 経済的な要因も含めて、音楽の勉強を続けるのはなかなか大変。その時に家族に理解があるなり、自分で奨学金を見つけるなりしなければならない。場合によってはまず社会に出て一旦サラリーマンとか全然違う道を行って、また音楽の世界に戻る人もいる。経済的なことで、いかに長く続けられるかということもある程度大事だと思う。

### (3)求めるキャリアアップ支援策

#### ① 研修・トレーニング

- 日本にいと、イタリア、ドイツ、フランスなどいろいろな国の歌曲や、ニーズによっては宗教曲とか、全部をやらなければならない。その国ごとの曲のスタイルや文化・風土がある。そのスタイルに合わせて歌ったり、解釈したりしなければならない。それらから出てくる国のニュアンスというものがある。その国のスタイルに合わせて歌っていくというプログラムがほしい。例えば旅行をさせてくれるとか、料理を味わわせてくれる、語学や考え方を勉強するなど、そういうものがあるといい。
- こういう分野のこういう人のレッスンが受けられるというカリキュラムがあったら、ちょっと興味がある。どこどこ大学に行きます、自分は何々先生の門下ですと言うと、大学にいる間はその先生の影響をずっと受ける。留学から帰ってきてからも、そういうしぐらみがあったりする。本当は心の中で違う先生のレッスンを受けてみたいとか、あの人のあんなところを聴いてみたいと思っても、多分実際の行動としてはなかなかできないと思う。

#### ② 公演機会の提供

- 演奏機会を増やしてほしい。それによって皆が学べる。恥をかかなければ先に進まない。
- 公演機会を増やすことはすごく必要だと思う。発表の場は必ずホールにしたい。日本で新しく作られたホールは、3割くらいの日にししか稼働していない。

#### ③ 他分野に触れる

- 今は映画や演劇など、舞台というものをなかなか積極的に観にいけない。同じパフォーマーとして、別の分野のものを観ることによって感動することがある。お客さんには他のものがこういうふう映っているとしたら、自分はこういうふうにお客さんにアプローチするべきかを学ぶことができる。
- 落語を聴いたり演劇を観ることによってヒントを得ることはある。私が友人として大事にしているのは、中国の墨絵画家や手芸家、落語家、ネイルアーティスト、囲碁の先生である。その人たちと一つのグループを作っている。全く違う分野の人たちと接することはとても面白い。
- 日本は声楽の環境はすごくいいと思う。だけど、異業種の人間と会うべきだとか、俺が勉強してきたことにあなたは何も言えないでしょうというくらい勉強してこいよと言う先生はなかなかいない。そういう話をしてくれる講座がほしい。
- 例えば音楽の世界以外に美術館に行くとか、観るとか聴くとか、年齢が高くなっても身体で感じるができるかどうか、芸が伸びるかどうかの一つの判断になるかもしれ



ない。

## 舞踊 Gr

### (1) 必要なスキル・素養

- 役者がコンテンポラリーダンスの舞台に出て、ちょっと動いてみるとダンサーに見えるというような舞台作品が増えているように思う。ダンスを始めるのが遅い人が増えているのかもしれないけれど、基礎技術を身につけるといふ段階は遅かれ早かれ絶対に直面することだと思う。
- 結局行き着くところは基礎であって、基礎は大切だ。「基礎」といってもいろいろあるけれど、それが踊りなんだというとき絶対に壁に突き当たる。
- 何を基礎と考えるかはすごく個人的なことだ。身体は自分だけのもので、ダンスの基礎については見直す時期に来ていると思う。これをやったらダンスができるというものすごく多様化している。本当に自分がやりたいことをイメージしないとやるべきことは漠然とする。ダンススクールに行けば何となくダンスができるということではない。
- クラシックバレエの場合はコンテンポラリーと比べて基本技術がまず最低条件。小さい時からの積み重ねが必要だし、日々の基礎トレーニングは食事と同じように必要なことだ。それ以上のキャリアになってくると、必要になるものは人それぞれ違うと思う。
- プロダンサーといってもこの人はプロだという境がない。そういう意味で基礎技術として必要だと思うのは、自意識というか客観的に自分を見られる精神だと思う。もちろんバレエの基礎、運動能力としての基礎は必要で、それにプラス、アートであれ表現であれ自分を自覚できる能力だと思う。ただ身体を動かすことイコールアートではないということを学ばせてもらう場が自分にはあった。

### (2) キャリアアップの条件

#### ① 横のつながり

- 日本という国自体がプロを養成することがない。先生は先生であるべくして学ぶ学校もないし、逆にプロで活躍できるような踊りだけでなく、いろいろなものを学べるような学校がない。プロの育成という話になった時に、今の状況でいくと育成する場がない。個人個人でワークショップをやったりすることはしているけれど、いろいろな教論を持った人たち、先生たちが合同で話し合うこともない。
- バレエ団という大きな括りを外せないから、毎回、初めて会う人が多すぎる。もっといろいろな人と会って、いろいろな人の踊りを観たい。踊りだったら観に行くことができるけれど、こういう話合いの場はない。別ジャンルの人とも触れ合いたい。

#### ② 身体トレーニング

- 最終的にはダンスは身体と向き合うということだ。向き合い方の方法論はいくつかあるけれど、向き合うべき時はその人によって違う。手遅れということもある。
- 自分は 20 歳でダンスの世界に入った。その時には自分の身体とものすごく格闘しなけ



ればならなかった。自分の身体に見合う技術は何かと考えていた時に、先生に武道、合気道やヨガの呼吸法を徹底的にやらされた。自分の日本人的な呼吸と身体とこの方法論はすごく合うと思った。

- このところ中国武術をやっている。中国武術はすごくスピードがあって、スピードを身につけるためにはどこの筋肉がどういうふうになっていなくてはいけないということを知りたい。中国の人はよく勉強している。日本の武術は精神的な部分が多いが、中国武術はそうではなくて重心の持ち方とかをかなり合理的に教える。合理的に教わりながら自分の身体の成り立ちを見ていける。自分も年齢を感じた時にはジムに通ってマシントレーニングをした時期もあったけれど、トレーニングとダンスの間にもうひとつ身体の脈絡を見ていくようなものがあると思う。それはある程度キャリアを積んだ人でないと必要ないけれど、そういう場所がもう少し開かれてもいい。中国武術は1つの例で、何でもいいからいろいろな角度から自分の身体を見つめられるものがあればいい。自分のやってきたダンスはこの方法でしか身体づくりができないというのではなくて、他のものにも開いていく意識が必要だと思う。
- 古武術に興味がある。動きの理論が面白い。知識だけで知っておくのではなくて、イメージとして考え方に触れることで自分たちの動きのきっかけになるのではと思う。
- 古武術は、身体を動かす発想が自分たちとは視点が違うというところに惹かれる。
- 古武術の動きは、普段無意識に人がしている動きかもしれない。危ないと思った時の運動性の根本にあるようなことに触れて、面白いと思った。
- 未知の場所に身体を持っていきたいという思いがある。中国武術を習ったのは中国武術の動きを取り入れたいからではなくて、身体の未知の領域に自分が惹かれるところがあったから。

### ③ キャリアアップ支援策

- 舞台がほしい。何よりも舞台に立つこと自体が重要と思う。失敗しても学ぶことが多い。
- 若い芸術家が自由に使える稽古場を完備してほしい。まず底辺、グラウンドが必要ということ。
- 日本の場合、誰だって公演ができる。欧米では一握りの保証されている人以外は全部クズ扱いされてしまう。そういう意味では日本のほうが断然チャンスがあると思う。日本はまだ成長過程で、すごく遅れているが、チャンスが今そこにある。まずは稽古場がほしい。

## 演劇 Gr

### (1) 必要な素養・スキル

- 言葉をちゃんと喋るということだ。外国の俳優たちは、言葉をちゃんと喋っている。日本の役者がちゃんと喋らないのはテレビがいけない。テレビだと、語尾がいくらかすれても、息だけで喋ってもマイクが拾ってくれる。舞台の場合、言葉を美しく喋るには、発声法と呼吸をしっかりやらないといけない。外国にはそういうメソッドがちゃんとあ

る。

- 舞台では母音と語尾が決定的だ。若い頃にしっかり身につけておかないとできなくなる。日本語が持っているメロディを音に出さないとつまらない。
- いま、養成所を一つ任せられていて、若い人たちの劇団を作っている。そこで思うのは、一人でしゃべるのはうまいが、相手に届かない。台詞の上での交流ができない。ちゃんと語尾まで相手に届かせてと言うけれど、そういう喋り方ができない。何を言っているのか分からない。基礎で一番大事なことは、日本語をちゃんと喋ることだ。そういう訓練ができていのかと思う。

## (2) キャリアアップの条件

### ① 古典に学ぶ

- 劇団を出たことによって、いかに自分には何もないかを思い知らされた。それまでは古典は振り返るな、我々の芝居は違うんだ、という悪いことばかり教わってきた。ところが商業演劇にいくと、古典が分からないと何もできない。特に歌舞伎や邦楽はほとんどやってこなかった。それで、自分から新内や殺陣を習いにいこうと思って、個々に知り合いを通じで勉強した。
- 日本舞踊は家元のところに行って定期的に教えてもらっているけれど、一番大事なはずの芝居の稽古ができない。教えてくれる人がいない。教えてくれる大先輩がいればと思う。昔は、芝居をやっている人は劇団に所属している人しかいなかったが、最近は若い時からフリーで芝居をしている人が多い。これはフリーの人にとって共通の問題ではないか。

### ② 知識

- 養成所を出た人や自分で勉強してきた人がいるけれど、習ってきたことはリアリズムだ。しかし、演技というのはリアリズムではない。日常性をどうやって脱皮させるか、そして自分がどう思うか、何を考えるかという勉強をしていない。役者は若いうちに、哲学、心理学など、いろいろな本を読まなければだめだ。そういうことが足りてない。

## (3) 求めるキャリア形成支援策

### ① 研修・トレーニング

- うちの劇団は年に1~2回、講師を招いて狂言を習ったり、ボイストレーニングの先生を呼ぶこともある。この先生はあちこちで活躍されている方なのでとても忙しい。定期的にイギリスに行って向こうのボイストレーニングを学んで来て、それを私たちに教えてくれるが、ボイストレーナーの数が少なく、教え方もうまいのでとにかく忙しい。ボイストレーナーという職種が日本の中で育ってくれるといいと思う。
- イギリスの劇団は、ボイストレーナーを抱えている。地方公演とか海外公演の時も、ボイストレーナーが必ず付いていく。
- 最近はボイストレーナーも増えてきた。日本にはボイストレーニングの専門家がいらない。そういうメソッドがなかった。
- 芝居は、声を出すことから身体を動かすこと、表現することなど、部分的にやるのがたくさんある。それなのに、それぞれの専門家がほとんどいない。だから劇団活動をす

るにしても、先輩が伝えていくというやり方しかない。その先輩も、専門家に教わったわけではない。

- 芸団協にはいろいろな分野の人たちが集っている。関西では現在、俳優のレベルアップを図ろうという活動をしている。方言の問題や、台詞のしぐさと言葉などをテーマにしながら、古典に学ぼうということで歌舞伎界や落語界から講師を招いて勉強している。だけど予算的に、1年に1回ずつしかできない。そういうことを地方の小さな予算もないグループが主催しているのではなくて、芸団協が主体となって全国を回っていくような勉強会をすればいいと思う。
- ずいぶん前に教育テレビで、先代の片岡仁左衛門さんが歌舞伎の歩き方を見せていた。物売りが朝仕入れて来た時の歩き方と夕方売り切れた時の歩き方というものもあった。こういうものを見せてもらえる場があるといいと思う。

## ② メソッドの確立

- 役者というものは、どんな所で仲間を見つけてもいいけど、指導者がいる、いないに関わらず、自分たちで勉強するチャンスはある。バレエをしたり声楽をすることも必要だ。そうやって仲間で鍛え合えれば、もしかしたら芝居ができるかもしれない。けれども、日本の演劇界には俳優のためのメソッドがない。外国ではたくさんやっているのだから、日本の演出家の中から持って来て積極的にやればいい。
- 教えるためのメソッドというものは、何十年も俳優をやっている人たちは研修を受けなくても実生活の中で知っている。ただ今まではそういうことに目が向かなかっただけだ。実際に劇団でやっていたりマスコミに出ている人たちのほうが演劇指導法を持っている。今はアメリカやイギリスの情報がいっぱい入ってきているから、それを知れば皆やると思う。ただそういうことに対して、できれば芸団協が文化庁から助成金をもらうようにしてもらいたい。

## ③ 練習場の提供

- 劇団の場合、稽古場は稽古のために使っているのでなかなか空かない。基礎練習する時間に合わせて稽古の時間を取るとするのは難しい。講師を呼んで稽古することもできない。稽古場が確保できない。劇団員だからといって、必ずしも全員が勉強しているわけではない。本当は稽古場がいくつもあって、常時、練習できて、自分の時間が空いている時にポンと行って練習できればいいけれど、すべての劇団がそこまでできているわけではない。
- 俳優たちが時間が空いている時に使える場所を提供してほしい。
- 公的な施設の会議室を借りようとする、演劇はだめだと言われる。
- それぞれの分野の人たちが空いている時間に、空いている場所でレッスンできるようになればいいと思う。オープンな感じでできるようになればもっと面白いと思う。個人的に声楽を習うのはお金がかかるので難しい。専門家がやっている所にちょっと入らせてもらえると、すごく勉強になると思う。

## ④ 交流

- 劇団協議会に入っていると、他の劇団の人との交流がある。しかし、フリーでやっている人は交流がない。

## ⑤ 文化レベルの向上

- 地方にも映画とか演劇の教育の場を作ってもらいたい。そういう場を作れば、優秀な俳優や年配の人たちがどんどん地方に行って、そこで自分の知識を教えてお金をもらって来られる。そういう場を作るのが芸団協で、文化庁がそれを助成すべきだ。そうすれば、地域の文化レベルはどんどん上がるし、俳優たちも生活の場が膨らむ。
- 文化レベルをどうやって上げるかという時に、一般的には芸術よりもスポーツのほうがレベルが高いという発想があるが、やめてもらいたい。そのためには我々のレベルも上げなければいけない。
- 芸団協には、国のお金を何とかうまく還元してもらって、芸術や文化水準が上がるように働きかけてほしい。国と俳優の仲介役になってもらいたい。
- つい最近、1 ヶ月に渡っていろいろな劇場で芝居をした。以前と比べて、終わる時間が早くなった所がものすごく増えてきた。お役所仕事になってきて、芝居が終わるのが 9 時半だとしても、10 時には出て行けと言われる。絶対に無理なことを要求される。何でこんなに厳しくなったのかと思う。延長料金を払いますと言っても、それすら認めない所が出てきてしまった。これが年々ひどくなってきている。これは芝居の世界だけではなくて、他のジャンルの人も困っていると思う。

## ミュージカル Gr

### (1) 必要な素養・スキル

- 若いうちは、踊れて動きが利かないと使ってもらえないのでバレエ、ジャズは必修。オーディションでタップがあるといわれればタップをやる。オーディションに必要なものはすべて身につけないといけない。レッスンはバレエとジャズを 2 つ受けていた。ものすごくお金がかかった。家族が理解してくれていたからできた。
- 新劇の人に混ぜてもらって芝居をするようになった。年を取ってくると歌と演技ができないと仕事がもらえなくなる。踊りはいいよとだんだんなってくる。これからは芝居と歌をやらなければと思う。
- いろいろやっていると、結局芝居なんだと思う。歌を歌うことも、踊りを踊ることも芝居だ。最初に求められるのが歌えるか踊れるかということで、この最初の敷居を越えるために大変な思いをした。

### (2) キャリアアップの条件

#### ① 上昇志向・好奇心

- ミュージカル俳優になって、これがトップですというのはない。どこまでも上がるから切りがなく、見えないからとにかくやるしかない。
- ミュージカルには作品のカラーがそれぞれある。それによって役もいろいろあるから、

自分に必要なものも1回1回全部違い、また勉強しなければならないことが結構出てくる。また足りない、また足りないと思う。

- フルートは憧れの楽器だった。ある時、フルートを吹ける人はいませんかと言われて、吹けないけれどやらせてくださいと言って猛練習した。また、あるシーンで役者さんが出られなくなって急遽、自分が殺陣をやることになった。殺陣をやったことがなかったので1日中教えてもらった。それで殺陣ができるようになったわけではないけれど、一振りすることがどれだけ大変か、どれだけ格好いいかが分かった。格好いいことや憧れることがあって、いろいろなことに対して素直に憧れられたり、やりたいと思えるようになった。

## ② 他分野に触れる

- 歌舞伎の玉三郎さんと3年間ぐらいご一緒した時、和物の形式美が日本人にすごく合っているということが分かった。超一流の人は何でもすごくて、それを見てしまうと、これもほしい、あれもほしいと思うから、ジャンルではないと思う。
- 別ジャンルと思ってやっていたことが、芝居で意外と求められるようになったことはうれしい。ずっとピアノが好きで弾いていた。芝居ができるピアニストに弾いてほしいとか、芝居のための曲を書いてほしいとなると、ただピアノを弾けるだけではできない。単に伴奏するのではなく、歌を使って芝居を構成したので編曲して演奏してほしいという仕事がいくつか入ってきた。ミュージカルとは関係ないと思っていたことが、そうではなかった。他のことをやっていたのに、実は一緒のことだったということが比較的起りやすいジャンルではあると思う。

## (3) 求めるキャリアアップ支援策

### ① 研修・トレーニング

- 先生が、この人いいよねと憧れているような演出家だったり、特に芝居の分野は薄いと思うのでそういうレッスンがあったらうれしい。一流といわれる人のレッスンを受けたいと思う。
- 全くの基礎の基礎をやっているところでも、レッスンを受けたいと思う。
- 今まで知らないで過ごしてきたもののレッスンを受けたいと思う。呼吸法もどんどん新しくなっている。
- 横のつながりがあるところのレッスンを受けたいと思う。踊りなら踊りだけではなく、行くと先生間でもつながりがあって、情報交換もできていて、狭い方法論だけではなく、一流の人のレッスンと同時に、敷居が低く、すごく開放されたスペースだと思える。どこに出ないといけないというしがらみがなくて、もう一つ開放された学べる場所があればいいと思う。

### ② 交流

- いろいろなことを個別に勉強してきて思うのは、歌の人は歌だけ、踊りの人は踊りだけというところが多くて、横のつながりがない。専門を極めることプラス、それぞれの横のつながりがもっとあってほしいと思う。何かをしたい時、1つの分野しかやっていなく



て横のつながりがないと、ものすごく敷居が高くなってしまったり、知らないで過ごしてしまう。学校の形でもいいし、それぞれの専門学校同士のつながりとか、お互いに人材を紹介し合えたり、先生を交換したりするようなシステムがあればいいと思う。

- 国立大学並みの、すべてきちんとしたことが教われるカリキュラムが必要だと思う。魅力のない人が教えたら魅力のないものにしかならないから、教える人の責任を問うカンパニーがあればいいと思う。

### ③ 情報提供

- ニューヨークのパフォーミングアーツセンターではオーディションの掲示板があって、行けば必ずそこに情報がある。先生の情報やレッスンの系統、内容まであって、仕事を求めている人の掲示板もある。そういうものが長いスパンでできればいいと思う。劇場、劇団、各事務所というのはオーディションにしてもクローズなものが多い。指名オーディションが多い。オーディションのクローズをもう少し取り払って、インターネットの掲示板にオーディション情報を流したり、先生のキャリア情報とかを実際に提示してくれるところがあると非常にいいと思う。
- 情報がどこにあるかだけでも分かればいいと思う。今日は周りの人にオーディションの情報を聞いてきてといわれた。

### ④ 公演機会の提供

- ステージがだんだん減ってきている。地方が建てた立派な劇場は稼動していなくて、その劇場は困っていると思う。一緒になってプロデュースができたり、演目を上演する手助けをしてもらえると公演数が増え、そこを狙って活動できる。

### ⑤ 割引制度

- 本当にお金がないとトレーニングはできない。レッスンを個別に受けているのなら養成所に入ったほうが安い。養成所に入るお金を稼ぐためには学校に行っている暇はない。とにかく歌のレッスンは高い。
- 歌は高いので回数行かれない。でも回数行かないとうまくならない。
- いろいろな公演をすべて自分で観るとしたら 10 万円ぐらいになる。歌舞伎を観にいけば日本語の深い意味が分かるし、常にいろいろなことを自分の中でキャッチしておくためにも、他の人の芝居とかを観たい。会費 1 万円払ったとしても半額で観られるとか、払わないとはいわないので割引制度があるといい。
- レッスンにも割引があったらいいと思う。芸団協に所属している団体はパスポートを持っていると 2 割引とかあったらいいと思う。

### ⑥ 練習場所の確保

- 稽古場は高い。事務所に所属している人は稽古場を持っていないので大変だ。身体を動かしたいとか、レッスンではなく自分で何かやりたいと思った時にビルの上で歌っていると警察が来る。
- お金もないから区民なら区民の劇団に入って練習場所を借りた。

- 公民館は演劇禁止というところが多い。
- ミュージカルのリハーサルなのに、声は出さないでくださいと書いてある。

## 演芸 Gr

### (1) キャリアアップの条件

- 踊りと三味線を習う落語家は多い。私は踊りを習っていた。18年噺家をやっていて、17年踊りをやっている。稽古は月に5回あって、だいたい1週間に1回。
- われわれの場合、他の師匠のところに行ってお稽古をつけてもらう。そのことに関して常にお金はかからない。どんなに売れている師匠でも、惜しげもなく教えてくれるのがこの世界だ。教えてくれた後、また見てもらって、ここはもうちょっとこうしなさいと細かく教えてくれる。落語や講談、浪曲の世界はお金にきれいだと思う。
- 太神楽の場合は、ほとんど自分の師匠から教わる。他のお弟子さんが別の師匠のところに行っても、おまえは流派が違うから教えられないと言われる。
- 講談の世界は多分落語ほど開けていないけれど、太神楽ほど狭くもない。講談の場合は、お稽古に関してはそれぞれ考え方がバラバラだ。私が稽古をつけてもらっている先生は、自分が持っているものをすべてぶつけてくれる。他の先生だと、台本だけ渡して、覚えてやっという人もいるようだ。あとは本当に稽古を断わる人もいる。
- 一応、習い事をしようという気はある。踊りをやっていると話の中で動きが役に立つ。講談は読み物で演技ではないので、そんなに動きがどうこうということはないけれど、ちょっと観せたりすることでお客様の想像がさらに膨らむ。また講談は品がなければいけないと思う。そういうものを身につけるためには踊りはすごく大切だと思う。
- 落語協会が踊りの師匠に依頼をして稽古をしている。稽古を始めて7年半くらいになる。別に踊りができるようになりたいのではなくて、話しをするうえで踊りができたら多少は何か違うかと思って習っている。歌や三味線もやりたいという気持ちもあるけれど、とにかく音楽が苦手なので、つい二の足を踏んでいる。
- 映画や絵を観るとか、音楽を聴きに行くとか、デパートを歩くとか、本を買うとか、何でもだいたい自分の好きなことをやる。映画も何かおもしろいところがあるかなとか、コンサートを観ても、こういう見せ方をするのかとったりする。芝居に行くと、こういう前説をして最初に客を引っ張るのかとか、そんなことをつい考える。そういうことすべてが落語につながっているのが現状だ。

### (2) 求めるキャリアアップ支援策

#### ① 研修・トレーニング

- 研修制度というか、稽古事みたいなことができるといい。お金のない若手でも、踊りを習いたければ先生をどこから連れてきてもらって、教室みたいなことをやってほしい。無料か、あるいは安いお金で習える制度を作ってもらえるといい。
- 今、落語協会で稽古をやっている。踊りや歌、三味線の稽古ができるといい。ボイストレーニングもいい。基本的に噺家はボイストレーニングをやらない。発声は自己流だ。

本気でボイストレーニングをやりたいと思ったら、自分で先生を捜してやるだろうけれど、そこまでせっぱ詰まらなないとやらない。芸団協が主催するボイストレーニングの教室があってもいいし、そういうのはここでやっていますよと芸団協が紹介してくれてもいい。そういうことがあるといろいろなものに挑戦できるし、それが自分の幅を広げるとか、深みを増すことになると思う。

- 海外のジャグラーとかいろいろな人と交流したい。交流する場があればいい。音楽関係の人を招いたり、文化の交流親善プラス、そこで何かを教えてもらうとか、教えるという場があるといい。

## ② 広報・宣伝

- 寄席の宣伝を芸団協にしてほしい。国立演芸場以外は、寄席が自分の所の宣伝をしていない。お金がないという理由からだと思う。もしお金が下りるなら、宣伝広告費限定で小屋に対して助成してほしい。
- 寄席にお客さんを運んでもらうことがベストだと思う。寄席にどんどんお客さんが来れば、僕らももっと寄席を一生懸命に務めて、いい芸を聴いてもらおうと努力する。ポスターもそうだけれど、週1、夜中でもいいから、テレビの5分番組で今はこういう師匠方が取りをとっていますとか、こういう目玉を何月何日に行ないますと言っていれば、かなり違ってくるのではないかと思う。
- 広告といっても、ポスターやテレビCM、新聞広告など、考え得るかぎり的手段をとって、一番効果的なものを作ってほしい。
- 広告費、宣伝費をぼんと下ろしてもらうのはいい。できるなら各寄席に1人ずつ、営業と戦略を立てる人を配置してもらいたいくらいだ。
- 今寄席が宣伝を打っていないのは、芸人のブランドでお客さんを呼ぼうとしているからだ。そこがそもそも間違いで、人が育たない。寄席が広告を打ったりして、寄席がブランドになってくれないと困る。新宿だったら末廣亭という所でしょう、あれは寄席なんだろうという認知度から入っていて、そこに出ている芸人だから、知っていても知らなくても、テレビに出ていようがいまいが、その小屋に行ったら楽しめた、あの人は知らなかったけれどおもしろかった、という状況が生まれてこない、スターが出てこない。
- インターネットは重要だということが分かった。落語協会でも、この人は役者もやりますとか、この人は日本舞踊がうまいから使えますよとサイトで宣伝するといい。

## ③ 公演機会の確保

- 講談の会が少ない。それは小屋がないからだ。落語は毎日寄席に行けば触れることができるが、私たちはそれがすごく少ない。耳も肥えないし、肌で感じることもできないのでいつもそれが残念に思う。テープをいくら聴いても、生で聴いて勉強するのは違う。呼吸はその場でないと分からない。また、楽屋で学ぶことも多い。

## ④ 練習場の確保

- 大道芸の稽古場がほしい。国立劇場は独立行政法人に変わって、採算性を求めるという



ことで、研修室を借りづらくなってしまった。今はある師匠の部屋を借りて練習をしているけれど、ナイフとか大きな花笠を使うので、電灯にぶつかって割れてしまう。稽古場がない時は外でやっているのですが、雨が降ると稽古ができない。その辺は死活問題になる。意欲があっても習いたくても、先生がいても場所がない。自分のポケットマネーで公民館を借りなければならない。

## ⑤ 地位向上

- 演芸畑は他の俳優や歌舞伎などに比べて、多少地位が低く見られているのかと思うことがある。落語と講談は人間国宝が出ているけれど、伝統芸の太神楽とか漫才でも出てもおかしくないような人もいる。それは文化庁の話になってしまうけれど、もう少し地位向上が大切だと思う。もちろん金銭的なサポートも大切だけれど、もっと世間にこういう立派な伝統的な芸を継いでやっていると知ってもらうには、人間国宝がいいのではないかと思う。

## ⑥ 他分野に触れる

- 芸団協主催で、その道の第一人者が講演会をするとか、そういう機会があるといい。直に役に立てようというのではないけれど、興味が持てれば聴いてみたい話もある。オペラの人や役者の話を聴いて、質問できるコーナーがあったら、行ってみたいと思う。おもしろがることも我々には大切なことなので。
- 芸団協に所属している団体には、話を聴いてみたい人がいっぱいいる。
- 演芸家は異業種に出る機会がほとんどない。そういうきっかけがあればいい。

## 邦楽 Gr

### (1) キャリアアップの条件

- 三味線はすごく多様で、同じ楽器でも、サイズがちょっと違ったり、作曲の仕方が違ったりする。かといって、全く違うわけではなくて、どこかでつながっている。長唄はあるところから派生していて、元を辿ってみると、そっちはそっちで違う枝ができています。その中で、もっと三味線の音楽を理解する手がかりはないか探っている。別のところから長唄の流れを見たいので、自分でお金を出して稽古に行っていた。それが実を結んでいるのかどうかはまだ分からない。
- 学校に行っていた頃は他分野の音楽に接する機会が多かった。芸大には副科という制度があって、他の楽器も習うことができた。楽器がどのようなになっているかということだけは知りたかったので、標準的なものはほとんどやった。邦楽は、長唄の笛を取ったり、お能や狂言、雅楽をやった。洋楽では管楽器ばかりやった。管楽器がどのような形で成立しているのか知りたかった。学校に行ったお陰で、色々な楽器のことが分かった。今は他の分野を習いに行くことはできない。他のジャンルの人と接点がある時に、どういう技法を使っているのか聞いたりする。
- この世界に入る前は、何でも屋だった。この世界に入ってから習いに行くことはない。

いろいろな演奏会を聴きに行ったり、映画を観たり、遊びに行くことが芸の肥やしになるのではないかと思っている。

- 今の仕事に入って 12~13 年になるけれど、身体ができていないというのがずっとあった。唄うたいは身体が楽器だから、どうしても身体が基本になる。仕事を始めたのは 26 歳からなので遅い。だけど親の七光りもあって、初めから舞台に出させてもらっていた。それはすごくありがたいことだったけど、その一方で、その下の基礎みたいなことをしないで来てしまったという負い目があった。特に足りないのは、唄うたいとしての身体ができていないことだ。だからずっと壁でもがいている。ジムに通ったりボイストレーニングに通ったり、いろいろとやっているけれど、結果は出ていない。

## (2)求めるキャリアアップ支援策

### ① 研修・トレーニング

- 座禅とかヨガを習いたい。
- 身体づくり系の講座は、安ければ行くかもしれない。ピラティスをやっているけれど、すごく高い。ボイストレーニングも高い。芸団協の講座がもっと安ければ行くと思う。ただ、先生との相性もあるし、ちゃんとした先生が来るかどうかというものもある。芸団協が調査して確実な人がやってくれて、しかも安ければ、行く人はいるかもしれない。
- 演奏する時の姿勢で、アレクサンダーテクニックというのがある。尺八には呼吸が浅いからうまく音が出ないという人がいる。呼吸法をやるだけで変わるのであれば、そういう講座があったほうがいいと思う。

### ② 研究機関の設置

- ボイストレーニングとなると、洋楽の人のところに行くことになる。そうすると、それを邦楽に転用する形になる。邦楽はその辺のメソッドが一番遅れている。三味線でも唄でも、邦楽らしい呼吸法とか、邦楽らしい弦楽器の使い方が体系的に研究されてもいいかと思う。民族音楽に共通していることかもしれないけど、邦楽は和製クラシックで、メソッドが固定されてないことが魅力になっているのかもしれない。そうだとすると、変な近代化をされると民族音楽の魅力を失ってしまうことにもなりかねないから、非常に難しい問題だと思う。唄でも三味線でも、その人の声がする、その人の三味線の音がする、ということが大事なかもしれない。メソッドが確立すると、皆同じ声が出たり、同じ音になることになる。メソッドができると、メソッドの外のことは研究しない人も出てくる。しかし 1 回ぐらいは、誰かがシステムチックな研究をしてもいいかなと思う。
- 邦楽の演奏家や三味線を作る職人にはメソッドはなく、経験だけだ。こうしてみたらこうなったとか、自分なりにこう思うということだけしかない。三味線には専門の研究機関がないように思う。あってもよさそうな気がする。
- 楽器も、講座より研究室を作ったほうがいいかもしれない。今、職人が試行錯誤でやっているけれど、結局は、その職人が好きな音色の楽器を自分たちが求めているような状況だ。こうしたらこういう音色になると分かれば、もっと幅が広がる。例えば演奏家の個性によって、こういう音が好きだから今までと違うこともできるというのができてくるのではないかと思う。

### ③ 阻害要因

- 楽器が本当に高い。ちょっと道具を変えたいと思っても、この商売は儲からないので買えない。張り替えひとつにしても高い。
- 三味線の張り替えをするのも大変だ。どの世界でも楽器は高いと思う。1回買って済めばいいけど、そういうわけにはいかない。
- 和服も高い。1本で何百万円もする。皆が着れば安くなる。
- 結局は悪循環で、それをどこかで変えないとだめだと思う。そうだとすれば、三味線研究所とか楽器研究所を作るしかない。安くて鳴る楽器を作ることが、ひとつの手かもしれない。

### ④ マネジメント

- 演奏家なら人前で演奏したい。どんな小さなものでもいいから、とにかく人に聴かせることが演奏家をやっている意味なのではないかという気がする。日頃音楽の勉強をしていて、発表する場を持つと思った時に、それにはそのやり方がある。だけど知らないことが多い。会場を取ることとか、プログラムを作るとか、たいがいは知り合いや先輩に聴く。人に頼らずにできればいいと思う。電話をすれば教えてくれる所があって、印刷物とか宣伝などをサポートしてほしい。個人でプロデュースしている所は高い。公の機関があって、そこで最低限のことでいいからサポートしてくれればいいと思う。
- 邦楽界には事務所に所属して仕事を取るという形態がない。事務所みたいに、演奏会の手配をしてくれる所があったらいいと思う。
- マネージャーでもいてくれたらいい。贅沢な悩みかもしれないけれど、仕事を断れない。例えば仕事の電話がかかってきて、その日は休暇ですと断ったら、全部クビになる。今は下手をすると毎日仕事が入ることになる。コンディションが良い時はいいけれど、ちょっと休みたいと思う時もある。皆知り合いだから、頼んで来る人の事情も分かる。断ったら困るだろうとか、いろいろなことを考えてしまう。
- すべて自分でやるのは無理があるのに一般的な所に頼まないのは、金銭的なことだけではなくて、任せられないということもある。一般の所は邦楽界のことを知らない。私たちの常識は、一般社会のそれとは全然違う。例えばチラシも、ある程度の品の良さが求められる。受付は評論家の先生たちの顔を知っていなければならない。

### ⑤ 公演の場の整備

- 演奏会場がまた一つ潰れた。それはすごく痛いことだ。そこは適当なキャパで、それほど高くなく、緞帳があった。1年前から予約できた。多目的ホールではないので、オーケストラが使うような音響でもなかった。
- 最近の小ホールには緞帳がない所が多い。完全に洋楽向けのものになっている。例えば三味線だと、撥ね返りがきつくてばち音ばかりが聴こえる。鼓もそうだと思う。
- どの会場も楽屋に畳がない。全部排除されてしまった。
- 楽屋に畳がないので、着物に着替えるのも大変だったりする。
- 基本的に三味線は座って準備をする。畳があるのとないのとでは全然違う。極端な話をすれば、何でオペラ専用の劇場を作るのにあれほど騒いでいたのに、邦楽はどうしたん

だろうと思う。日本の楽器の専用ホールを作るほうが先ではないかとすごく憤慨した。

#### ⑥ 他分野交流に触れる

- 演劇の人は何でも知りたいのだと思う。邦楽を大いに利用してくれたほうがありがたい。こちら側からは何もできないと思う。言ってくればいくらでもサポートする。例えば、三味線はどういう弾き方をすれば師匠に見えるかというのは、ちゃんとした人に聞いたほうが良いと思う。私たちはそれを教えることはいくらでもできるけれど、私たちが演劇的要素を学んでもあまり役立たない。
- 他業種の人が三味線の講座を聴きに来て、そこで交流が生まれるかもしれない。講座を開くことで、いろいろできそうな気がする。邦楽はこちらから発信したいという気持ちのほうが強い。広げる場がまだ少ない。
- 異業種の交流よりも、芸団協で邦楽の講座を持ってもらったほうが違った動きができると思う。
- 他の業種の人と友達になれたら楽しいと思う。
- 何かをしようと思ったら情報はいっぱいある。電車に乗ってもあちこちに広告が張っているし、劇場に行ってもチラシがいっぱい並んでいる。自分が興味を持ちさえすれば、今は何でも観られるし、聴ける状態にあると思う。そこから交流となると難しい。例えば自分が講義で教えて、個人的に交流できるかもしれないし、その場限りで終わってしまふかもしれない。知るだけならいくらでも方法はある。自分から動けば、そうこうしているうちに自然に交流できるようになると思う。
- 音楽をやる人は弾くだけではなくて、何かやろうとすると、何もかも自分でやらなければならないので、この世界に止まりがちだ。どこかが交流の場所を与えられたり、きっかけを作ってくれたりするたびに、もっと外に発信しなければいけないと思ひ起こさせてくれる。